

マイクロスコープを用いた歯周治療～歯根表面に着目して

Microscope-enhanced periodontal treatment: Focusing on the root surface

鈴木 雅彦
AIC デンタルクリニック

抄録

歯周病は、歯周病原細菌の感染と免疫応答の結果、組織が障害される感染症である。その治療法は、原因除去を行うことが重要であるとともに、臨床においてはその精度が求められることになる。

従来から歯周病治療は、プラークコントロールに始まり、スケーリング、ルートプレーニングおよび歯周外科が行われ、メンテナンスに移行するわけであるが、治療の目的は歯周病原細菌の除去を行い、歯周組織の環境を変えて、歯周病の再発を予防することにある。

今までの歯周治療とその成果を振り返ってみると、少なくとも日本においては歯周治療の成果が上がり、歯周病が劇的に減少しているとは感じ難いのが事実であろう。歯周病の検査方法やそれに伴う診断、治療は長きにわたりほとんど変わっていない。同じ目的を持って治療に当たっていることは紛れも無い事実であるが、成果が出にくいのは手技の精度が変わっていないからではないかと考えている。

ここで歯根表面に焦点を当ててみたい。歯根表面に付着していた各種抗原が完全に除去できることは、歯周組織再生や創傷治癒の観点から非常に重要であるが、果たして歯根表面に付着した歯周病原細菌や、細胞内毒素（リポ多糖、以下 LPS）、スメア層などの抗原を完全に除去できているのであろうか。

近年、歯科領域においてマイクロスコープやルーペが良く利用されている。拡大視野下では、臨床の手技はより正確性を増すと考えられる。しかしながら、細菌やタンパクレベルのサイズは肉眼で確認できないわけであり、その精度については理解しておかなければならない点がいくつかあるであろう。

一方で、歯周治療でマイクロスコープを使用する利点として、術式がより侵襲の少ない術式を選択できることが挙げられる。例えば、歯肉を剥離せずにマイクロスコープを用いて、歯周ポケット入り口からアプローチしてプラークや歯石を除去することが可能であろうし、Colltelini と Tonetti らが報告している minimally invasive な歯周外科治療である MIST、M-MIST の術式もより正確に行うことができるであろう。

患者にとっては治療が低侵襲であることは恐怖感を取り除き、歯周治療に対し前向きになれるのかもしれない。今回、この場を借りて歯周治療におけるマイクロスコープの有用性とその限界について私見を述べさせていただき、皆様とともに歯周治療時に求められる新しい視点を議論できることを楽しみにしている。

略歴

- 1992 岡山大学歯学部歯学科卒業
- 1992 岡山大学歯学部第二補綴科入局
- 1994 岡山大学歯学部第二補綴科退職
- 1994 (財) サンスター千里歯科診療所入社
- 2000 ノースカロライナ大学歯周科留学
- 2003 (財) サンスター千里歯科診療所退職
- 2005 AIC デンタルクリニック開業
- 2013 広島大学大学院医歯薬保健学研究科入学
- 2020 広島大学大学院医歯薬保健学研究科卒業 博士号取得